

Title	芸能神河勝：その侏儒的要素
Sub Title	
Author	三村, 昌義(Mimura, Masayoshi,)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1985
Jtitle	三田國文 No.4 (1985. 10) ,p.1- 10
JaLC DOI	10.14991/002.19851000-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19851000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

芸能神河勝

——その侏儒的要素——

三村昌義

はじめに

小子部については早くから侏儒との関連、またその祖、蜾蠃と雷の説話から小童すなわち雷神という捉え方がなされて来た。小稿はそれらを踏まえた上で、小子部の職掌のもう一つの側面を考え、さらにその投影を、中世芸能民に祖神と仰がれた秦河勝の上に探ろうとするものである。

一

我が国古代宮廷においても、中国、西洋にみられた侏儒なる道化役の存在したこと、またそれを統括したのが小子部であったことは、ほぼ定説とみてよいと思う。『神武記』及び『新撰姓氏録』和泉皇別には、小子部連の祖は神八井耳命とされており、神八井耳命に関しては『記』に

吾者不能殺仇。汝命既得殺仇。故、吾雖兄不宜為上。
是以汝命為上治天下。僕者扶汝命、為忌人而仕奉也。

とある。これは海幸彦の山幸彦に対する服従と同様、神八井耳命の

子孫が宮廷にある芸能をもって服従を誓ったことを物語る説話とみてよいだろう。因みに、神楽と深い関係がある多氏も小子部と同祖とされているのも注意される。

『記紀』その他の文献にみえる侏儒とその芸能についての考察には多くの先学の論考があるが、ただ一つ再考してみたいのは、小子部連の名称の起源説話、すなわち『雄略紀』六年春三月条である。

三月辛巳朔丁亥、天皇欲使后妃親桑、以勸蚕事。爰命蜾蠃^{人名}、^{此云須我屋}聚国内蚕。於是、蜾蠃、誤聚嬰兒、奉獻天皇。天皇大咲、賜嬰兒於蜾蠃曰、汝宜自養。蜾蠃即養嬰兒於宮牆之下。仍賜姓、為小子部連。

ここで今まで注意されていないのは、何故蜾蠃に命じて蚕を集めさせたのかという点で、この伝承は蚕と児を誤まって集めた故にという小子部連の起源説明以前に、侏儒が養蚕に関する何らかの職掌を担っていたことを推測させるように思う。

養蚕の術はどの道大陸伝来のものであろうが、それが遙か古代からあったという意識は『記』の殺された大気津比売の頭から蚕が化生したという伝承、『神代紀』第五段の一書（第二）などからもう

かがわれ、天然の山繭から糸を取ることも行なわれていたのかもしれない。それはともかく、養蚕という人工の技術は婦化人によってもたらされたものであることは確実で、ことに、それが史実であるかどうかは別として、伝承上は秦氏と関連が深い。

A 大鷦鷯天皇〈諡仁徳〉御世、以百廿七具秦氏、分置諸郡、即使養蚕織絹貢之。天皇詔曰、秦王所獻糸綿帛、朕服用柔軟、溫暖如肌膚、仍賜姓波多。次登呂志公。秦公酒、大泊瀬幼武天皇〈諡雄略〉御世、糸絹帛委積如岳。天皇嘉之、賜号曰禹都万佐。〔姓氏錄〕左京諸蕃、大秦公宿禰条。

B 大鷦鷯天皇〈諡仁徳〉御世、賜姓曰波陀。今秦字之訓也。次雲師王、次武良王。普洞王時、秦民惣被劫略。今見在者、十不存一。請遣勅使檢括招集。天皇遣使小子部雷、率大隅・阿多隼人等、搜括鳩集、得秦民九十二部一万八千六百七十人。遂賜於酒。爰率秦民、養蚕織絹、盛饗詣闕貢進、如岳如山、積著朝廷。天皇嘉之、特降寵命、賜号曰禹都万佐。〔姓氏錄〕山城諸蕃秦忌寸条。

同様の伝承は『古語拾遺』『雄略紀』十五、十六年条にもみえ、十六年条は、養蚕を奨励している初見である。

さて、このBにも小子部の名がみえる。雷は蜺嬴の雷を捉えたことによつての改名であることはいうまでもない。秦氏の民が四散してしまつたので小子部雷が隼人を率いて集めたという点にも芸能的職掌の存在をうかがわせるが、彼によつて集められた秦の民によつて養蚕が盛んになったという記述の裏にも、やはり小子部、侏儒と養蚕とのつながりを憶測せしめるものがある。

侏儒との直接の関連は文献上には求め得ないが、恐らくその性格

からして侏儒と考えられていた神に少彦名命がある。『記』はその出現について「波の穂より天の羅摩船に乗りて、鵝の皮を内剝に剝ぎて衣服に為て、帰り来」たと述べ、『紀』一書はその小人性を「淡嶋に至りて、粟莖に縁りしかば、弾かれ渡りまして常世郷に至」ったとも「白薮の皮を以て舟に為り、鷦鷯の羽を以て衣にして、潮水の隨に浮き到」り、「大己貴神、即ち取りて掌中に置きて、翫びたまひしかば、跳りて其の頬を齡」ったと伝えている。ともかく、極小人であつて、常世国から往復している性格をここにみる事が出来る。ところで『続日本後紀』仁明天皇十一年三月条に次のような記事がある。

但馬国上帽子、単衣、腰帶、草鞋、鎌、刀子等一櫃。其体様卑小、不似此間之物。疑侏儒国物流著賊。

小さいものが漂着したという伝えは『今昔』卷三十一「越後国被打寄小船語第十八」や時代はうんと下るが『看聞御記』永享三年八月廿八日条にも

小人嶋之人其長一尺四五寸、歳五十許之小人来。

などと記され、以下江戸期の隨筆にも散見するが、古代、海の彼方に侏儒の住む国が想像されていたことを『続日本後紀』の記載は示している。とすれば、少彦名は侏儒の斎く神であつたとの想像も不可能ではあるまい。ともかく、少彦名は常に大己貴と一対となつて登場し、大己貴の外來魂とも考えられるが、『雄略紀』七年七月条にあるごとく、蜺嬴が捕えて來たのは三諸岳の神である大蛇、すなわち大物主神（大己貴）であつた。『靈異記』の所伝はやや異なり、雷岡の地名説話となつて大物主神という神名はみえないが、雷を捕えようと走り罷る途中に落雷という形で神の示現に遇い、「雷神を

請け奉れり」と奏上している。加えて『多神宮注進状』の

即位九年（雄略、筆者注）乙巳初春、天皇依_レ靈夢、詔_レ蜺_レ蠃_レ奉_レ祭_レ祀皇枝彦日根兩神於子部里。今天子部神社は也。

という所伝を参看すると、ここに小子部蜺蠃の司祭的な性格を汲み取ることができよう。『天武紀』元年六月辛酉朔丁亥条に

天皇留_二皇后_一、而入_二不破_一。比_レ及_二郡家_一、尾張国司守小子部連鉏鈎率_二三万衆_一歸之。天皇即美之、分_二其軍_一、塞_二処々道_一也。

とあるのも、壬申の乱に際して実際の軍事にたずさわったというよりも小子部が戦いに関しての呪術を行なったことを示しているのかもしれない。

さて話がやや遠廻りしたが、小子部がその司祭的性格から少彦名命を齋っていたとの想像が許されるならば、侏儒と養蚕との関わりも少し展望がひらけて来そうである。蚕は『仁徳記』に「一度は蠶ふ虫に為り、一度は鼓に為り、一度は飛ぶ鳥に為りて、三色に変わる奇しき虫」と表現され、後述の如く皇極三年常世神の事件（後述、この似而非常世神の正体はアゲハの幼虫である。）を起こしているほど不可思議なものとされていた。一方、少彦名命はさきにみた如く常世国へ往復しているし、その乗物であった天羅摩船は通説ではガガイモとされ、その実を二分すると小船の形に似るとされるが、或いは繭の形を表象しているのかも知れず、その衣服であった鵝も蛾の誤りとするならば、蛾の皮をまとった蛹とも考え得る。すなわち少彦名命は小子部によって齋かれた蚕神としての一面を持ち合わせていたという想像ができなくはない。

ここで思い合わされるのが『信西古楽図』に描かれている「入壺舞」の図である。この絵自体が中国伝来のものなのか、或いは實際

の演技を見て描いたのか、想像図なのか議論のあるところだが、ともかく台の上に置かれた壺から上半身を出して踊っている姿と、逆に壺に上半身を突込んで足を逆立ちのようにしている姿が描かれている。幻戯としては人の入れそうもない小さな壺に入入りする点に興味があつたに違いない。『信西古楽図』はこの他にも『江家次第』『新猿楽記』に侏儒舞とならんで列挙してあるような多くの曲芸、輕業、幻戯を描いている。いずれも侏儒の身体的特徴が生かされた芸ではあるが、特に小軀であることが必須の条件と思われるものは、入壺舞だけのようで、換言すれば、その他の芸は後に侏儒が散楽戸の廃止等によって宮廷から離れるにつれて、その輕身、短軀を生かして習得して行つたものではないだろうか。とすれば、侏儒の本芸ともいふべきものは入壺舞であつて、それは蚕が繭を食い破つて出て来るさまを模した、養蚕に當つての呪術儀礼にその發生があつたのではないかとも思われる。或いは折口がいう新室はがひの侏儒舞（殊舞）がこれで、醸された酒壺に出入して祝福する精霊の姿と考えることも可能であろう。

侏儒の貢進には季節があつたようで、『武烈紀』八年三月、『天武紀』四年二月、さらに『天智紀』十年三月条に

常陸国貢_二中臣若子_一。長尺六寸。其生年丙辰至_二於此歲_一、十六年也。

とあるのも侏儒とすると、二月、三月という時期が選ばれていることが分る。『雄略紀』の蜺蠃が勅を受けたのも三月であつた。思うに、二月、三月から養蚕は本格的な季節を迎える。侏儒貢進の季節がこの時期と重なるのは、そういうことと何らかの暗合があるのである。もう一方では上巳の祓との関係が考えられる。形代と同じ

く侏儒に穢を移して蔽うことが行なわれたことは十分に考え得る。常世国へ帰って行った少彦名命は穢と共に流されて行ったとも考えられよう。⁽¹⁾

雷が鳴ると「くわばら、くわばら」と唱えることは全国的に行なわれている。雷が落ちて桑の木に狭まれて頻死の状態になったので二度と桑には落ちないのだなどと説明をつけているところが多い。桑は弓に作ったりもして呪術的な植物でもあるが、何といっても養蚕と関係が深い。雷神を描えた小子部と蚕と桑と、この昔話には何か忘れられた繋りがあるのかもしれない。因みに奥羽では蚕を「トドコ」と言い、貴児の意であるらしく、蚕に限らず太陽や雷のことでも「トウトコ様」という地方のあることが報告されている。⁽²⁾

二

平安中期以降、太子信仰が興って来るにつれて秦河勝という人物は太子を守護し守屋を滅ぼした軍神としての性格、また舞楽、猿楽などの芸能民の祖神としての性格を持つようになる。この方面に関しては、すでに服部幸雄氏が「宿神論——芸能神信仰の根源に在るもの——」という優れた論考において、きわめて詳細かつ多岐にわたって考察されている。⁽³⁾以下の小稿はもっぱらその御説に従いつつ、あえて蛇に足を描くの論を述べてみたいと思う。

欽明天皇の御宇に、大和国泊瀬の河に洪水の折節、河上より一の壺流れ下る。三輪の杉の鳥居のほとりにて、雲客此壺を取る。中にみどり子あり。かたち柔和にして玉のごとし。是、降人なるがゆへに、内裏に奏聞す。其夜、御門の御夢にみどり子の云、「我はこれ、大国秦始皇の再誕なり。日域に機縁ありて

今現在す」と云。御門奇特に思しめし、殿上に召さる。成人に従ひて、才智人に越え、年十五にて大臣の位に上り、秦の姓を下さる。秦」といふ文字「はだ」なるがゆへに、秦河勝是也。(中略)彼河勝、欽明、敏達、用明、崇峻、推古、上宮太子に仕へ奉り、此芸をば子孫に伝へ、化人跡を留めぬによりて、撰津国難波の浦より、うつほ舟に乗りて、風にまかせて西海に出づ。播磨の国坂越の浦に着く。浦人舟を上げてみれば、かたち人間に変わり。諸人に憑き祟りて奇瑞をなす。則、神と崇めて、国豊也。「大きに荒る」と書きて、大荒大明神と名付く。今の代に靈験あらた也。本地毘沙門にまします。上宮太子、守屋の逆臣を平げ給し時も、かの河勝が神通方便の手にかゝりて守屋は失せぬ、と云々。(『風姿花伝』第四神儀云)

抑コノ河勝ハ、昔推古天皇ノ御宇ニ、泊瀬川ニ洪水出ヅ。水上ヨリ一壺ノ壺流れ下ル。人不審ヲナシテ、磯城島ノアタリニテ取り上ゲミレバ、中ニ只今生マレタル子アリ。スナワチ抱キ取ルニ、人に託シテ云、我ワコレ、大唐秦ノ始皇帝ノ再誕ナリ。日本ニ値遇アテ、今スデニ来レリ。イソギ朝ニ奏スベシト。ヤガテ此由奏聞ス。御門奇特ニ観覧アテ、君辺ニ置カレテ、生長ニシタガヒ、才智世ニスグレ、賢臣忠臣ノ眷ヲウク。ソノ後、上宮太子ノ御身ヲ離レズ随順シタテマツル。(中略)業ヲ子孫ニ譲リテ、世ヲ背キ、空舟ニノリ、西海ニ浮ビタマヒシカバ、播磨国南波尻ノ浦ニ寄ル。猿人舟ヲ上ゲテミルニ、化シテ神トナリタマフ。当所ヲンリニ憑キ祟リ給シカバ、大キニ荒ルム神ト申ス。スナワチ大荒神ニテマシマス也。(中略)ソノ後、シヤクシノ浦ニ崇メ、宮造リス。次ニ、同国山ノ里ニ移シタテ

マツテ、宮造夥シクシテ、西海道ヲ守リタマフ。所ノ人、猿楽ノ宮トモ、宿神トモ、コレヲ申タテマツルナリ。〔明宿集〕

服部氏は右の二つの猿楽の徒の伝承等を通して、平安時代以降登場した多くの芸能民の中に秦姓を名告る一群があり、彼等は賤視を受けた、所謂「夙の者」であつたがゆえに宿神、すなわち外来の障礙神である摩陀羅神、すなわち秦河勝を祀り、それは翁に表象されていた。又、その祀り齋く神の威ゆえに畏怖され、それゆえに呪術的職能を持ち続け得たことを明らかにされたが、河勝が摩陀羅神であり、かつ宿神であるというふうに習合されるには、河勝自身にそれと呼び迎える要素がなければならぬ。以下その点を少し掘り下げてみる。

摩陀羅神は円仁（慈覚）によつて将来されたという障礙神で、各地の寺社の後戸に全くの秘仏として祀られた靈威甚しい護法神であつた。又宿神は柳田国男が『石神問答』『毛坊主考』に説くごとく、境に祀られて外から侵入して来るものを鎮圧する神である一方、守久神などと表記されて、『続古事談』卷五諸道に典藥頭雅忠の夢にあらわれて火災を予知したという小童としても表現される。『当道要集』の「同系図之事」に

一、守宮神御仕社なれば一代猿喰間敷事。

とあるのも、守宮神の使わしめが猿である以上、その本体も小さい神であることを示していよう。加えて服部氏は『古今著聞集』卷十一、『撰集抄』八、『十訓抄』下の一〇などにみえる鞠の精も同じく守久神であろうとされている。芸能の神として小さい神が考えられている点には注意する必要がある。

さて以上のことから宿神、摩陀羅神が河勝に結びつく要件は、靈

威の強い祟り神であること、小人であることの二つになる。摩陀羅神も靈威は大きい、後戸に秘仏とされることからすると当然小さい姿なのであろう。さきにあげた『風姿花伝』『明宿集』の伝える河勝は、正しくこの要件を満たしている。傍線 a、a' は祟り神的性格、b、b' は明らかに小人でかつうつほ舟に乗ってやって来た常世神であることを示している。

右の二つの伝書に出て来る播州赤穂郡坂越には大避神社があり、かつてこの千種川流域には大小三十社もの分祠があつたという。いずれも秦河勝を祀り、二つの伝書とはほぼ同様の縁起を伝えている。坂越は『明宿集』には「尺師」とあり、一つの境であつたことはまちがいない。したがってここに境を守る強力な神が祀られたに違いない。この赤穂の地が古くから秦氏の根拠地であつたことは、延暦十二年四月十二日付「播磨国坂越神戸西郷解」の、天平勝宝五年赤穂郡の人、秦大炬が堤を作るのに失敗したという記事、又『三代実録』貞観六年八月十七日条

播磨国赤穂郡大領外正七位下秦造内磨借・叙外従五位下。

さらに『朝野群載』所載、長和四年十一月十六日付大皇太后宮大夫家御領についての播磨国符に有年庄（現赤穂市）の庄司寄人四十一人のうち秦姓の者が十二人もいることなどによって明らかである。⁽⁴⁾

『続日本紀』文武二年四月条に

侏儒備前国人、秦大兄賜姓香登臣。

とあるのも、臨接の備前まで秦氏が進出していたことを示すものであろう。

こういった人々の中に神楽、舞楽、散楽などの芸能にたずさわる者が出てきたことを示す史料の一つが

此国（播磨、筆者注）百姓過半は六衛府舍人、初府牒出^{（5）}国以後、偏称^{（5）}宿衛不備課役。（『類聚三代格』昌泰四年閏六月廿五日付官符）

であると思われる。近衛の舍人たちが相撲節会などに物真似的な芸能を演じていたことはよく知られる通りで、こういった人々によって祖神河勝の伝説は育まれていったことも確実である。その一つが『聖謄抄』の次のような伝えにもなっている。

秦川勝先祖系図有二様。一、天王寺秦氏^{（6）}舞元。二、広隆寺縁起様。

（略）懷王以^{（7）}項羽^{（8）}為^{（9）}大將軍。以^{（10）}高祖^{（11）}為^{（12）}次將。發^{（13）}衆萬軍兵衆。打^{（14）}秦國^{（15）}了。楚軍乱入燒^{（16）}咸陽宮^{（17）}。經^{（18）}三月。誅^{（19）}殺^{（20）}子嬰帝了。從類皆悉殺害了。子嬰帝有二男^{（21）}。帝后恐^{（22）}楚軍^{（23）}身著^{（24）}布衣^{（25）}。鄙^{（26）}形替^{（27）}言隱^{（28）}帳中^{（29）}育畢。至^{（30）}成人^{（31）}。其名曰^{（32）}酒。自^{（33）}瓶中成人^{（34）}故也。（中略）秦國逃去。日本國人王卅四代推古御代。摂津国難波浦化来。是則子嬰帝之王子也。（中略）今見^{（35）}淀河末其甚美也。定源奇歎。隨^{（36）}流^{（37）}至^{（38）}山城^{（39）}山林^{（40）}寄住。今平京跡也。推古天皇此酒^{（41）}賜^{（42）}姓云^{（43）}秦公^{（44）}。（中略）此秦公有^{（45）}二^{（46）}人子^{（47）}。兄名^{（48）}敏通^{（49）}。其為^{（50）}人貴^{（51）}。属^{（52）}東京^{（53）}也^{（54）}。是今大極殿地主也^{（55）}。弟名^{（56）}三川勝^{（57）}。其卑為^{（58）}舍人^{（59）}也。属^{（60）}西京^{（61）}。広隆寺本願也。

この記事についてはいくつか言及すべき点があるが、取りあえず舍人といえは折口信夫が指摘した『神楽歌譜』の

大宮の小子舍人 玉ならば 昼は手にする 夜は纏きねむ

が思い出される。さきに挙げた『統紀』の記事が侏儒に功があつて地位の高まったことを示すならば、侏儒から小舍人となり童子となる道筋も十分にうなづけるものがある。『聖謄抄』はただ河勝が舍

人となったと伝えるのみだが、ここに彼が小人と考えられた下地を考えられなくもない。

猿楽の徒の持ち伝えた伝承と大避神社の縁起がどこまで関連があるのかは、俄かには断じ難い。が、ともかく、平安時代を通じて秦氏を名告る芸能民がいて、その流れが四天王寺の伶人、或いは猿楽の徒という形で中世にまで続いてきたことは確実である。

三

さてそれでは歴史上にあらわれる秦河勝に祟り神的性格、小人的性格がみられるかどうかを検討してみよう。『紀』にみえる彼の事蹟は次の三点である。

（イ）推古十一年十一月条 蜂岡寺の造立。

（ロ）推古十八年十月条 新羅・任那の使の入京に際し、新羅の導者を勤める。

（ハ）皇極三年七月条 富士川付近に起こった常世神と称する虫を祭ることを止めさせた。

加えて考えられることは、

（ニ）聖徳太子の重用。

（ホ）推古三十一年七月条、新羅の奉った仏像を広隆寺に安置するのに関連したと思われること。

以上が史料にみえる河勝の全てといつてよい。（イ）は広隆寺のある場所をなせ蜂岡というのかは不明だが、小子部螺贏の「スガル」も同じ蜂のことである点にだけは注意されよう。（ロ）は秦氏が新羅系の帰化人であるということに関連するものであらうと思われるのみである。したがって河勝が伝説化される源は（ハ）にあり、それに仏法興隆

と結びつく(4)、(5)が加味されていったと考えるべきである。皇極三年七月に起こった「常世神事件」についての『紀』の記述は次の通りである。

秋七月、東国不尽河辺人大生部多、勸祭虫於村里之人曰、此者常世神也。祭此神者、致富与寿。巫覡等遂詐、託於神語曰、祭常世神者、貧人致富、老人還少。由是加勸、捨民家財宝、陳酒、陳菜六畜於路側、而使呼曰、新富人来。都鄙之人、取常世虫、置於清座、歌舞、求福棄捨珍財、都無所益、損費極甚。於是、葛野秦造河勝、惡民所惑、打大生部多。其巫覡等、恐休勸祭。

これについて古代史のほうでは種々議論のあるようだが、今問題とすべきは、発生した場所が富士川周辺であること、これを収束させたのが秦河勝その人であることの二点に絞られよう。富士川周辺の常世神信仰については旧稿にもいささかふれるところがあったが、より詳細には平野邦雄氏が、宝亀八年常世連へと改姓した赤染造長浜の有力な根拠地がこの付近、遠江国秦原郡で、常世連という陽姓は東国の常世神信仰に大いに関連し、この地の秦氏と同族もしくは同一の生活集団を形成した氏族で、常世神信仰の母体となったこと、神名式秦原郡敬満神社は功満の転訛で、彼等の祖神であることを推論され、さらに神功皇后らが海の彼方の常世国より出現する少名御神を寿ぎ、氣比大神を祭る説話、仁徳天皇と武内宿禰が雁の「卵生」を祝して「世の長人」の歌を詠んだ説話の検討を通して、常世説話が新羅または秦氏と密接な関連があるという注目すべき論を述べられている。今、その驥尾に付して論を進めるなら、河勝がこの事件に登場するのは、大生部が秦氏の所撰であったにせよ、河

勝が国司に任ぜられていたにせよ、河勝その人でなくては収束不可能な要素がこの事件にあったからと考えなくてはなるまい。恐らくそれは、常世神なる蚕を養い機を織るという伝来の職掌を持っていた秦氏の信仰、呪力をもって「その長さ四寸余り、その大きな頭指ばかり、その色緑にして黒まだら」という似而非、常世神を制するということであつたに違いない。ここに明確に河勝の司祭者的性格が読み取れよう。常世神の司祭はすなわち常世神自身の姿でもあつた。そしてさらに想像を加えるなら、その河勝に助力したのは養蚕の儀礼にも関与したであろう小子部、侏儒ではなかったであろうか。ともかくこの事件は呪力をもって行なわれた一種の戦争であつたに違いない。ここに壬申の乱に際し子部鉏鉤が二万の軍を率いたという先にもふれた『紀』の記述が思い合はされる。

太秦は 神とも神と 聞え来る 常世の神を 打ち懲ますも 事件を収束した河勝を人々が誉めそやしたという歌謡で、この事件がこういう歌謡とともに伝えられていること自体、すでに説話化されつつあつたことを示しているが、「神とも神と聞え来る」というあたり「河勝なればこそ、神のなかでも神という聞えの高い常世神をも」といったニュアンスがうかがえる。大げさに言えば河勝を英雄視している。このあたりに軍神として太子を助ける河勝像はすでに出来上っているとみていい。したがって河勝が威力ある神、軍神となつてゆく要因はたしかにこの事件にあったのである。

四

大己貴と少彦名、牛若丸と弁慶のように、大小の対立として捉えられる人物は説話上類型が多い。太子と河勝もこの類型に入れるこ

とができようが、十六才の太子を助けて活躍するのが河勝ということになると、大が河勝、小が太子と考えられそうだが実は逆で、太子という仏法興隆のための威大なる存在を助けるのが河勝で、したがって小が河勝ということになる。太子像には二人の侍童をつれた構図が多いが、その侍童に当るのが河勝の立場であるといえよう。小人が武人として威力の優れたものであったのは小部組鉤の例をはじめとして、『天武紀』十三年正月条に射人として侏儒を召した記事があるほか、『文徳実録』斉衡元年十月九日条に備前守藤原朝臣大津は

身長短小而意氣難奪、尤善步射、頗超等輩、年十八為舍人、と記されているし、『陰徳太平記』には赤松満祐が三尺入道と呼ばれたことがみえる。所謂、鬼を退治した一寸法師もその類に入るのである。従って、河勝が軍神として伝承されてゆくなかに、彼を小人と考える心意は十分に用意されていたのである。そして小人は即ち祟り神とも考えられていた。『三代実録』天慶四年十月条に

昔日聖徳太子。創建平群郡熊襲道場。飛鳥岡本天皇。遷建十市郡百濟川辺。号曰百濟大寺。子部大神在寺近側。含怒屢燒堂塔。天武天皇遷建高市郡夜部村。号曰高市大官寺。和銅元年遷都平城。聖武天皇遷建平城。号曰大安寺。

とある。同様の伝えは『大安寺縁起』『大安寺伽藍縁起』にもみえ、小童が雷神と考えられていたことから、さらに全てを焼き尽くす祟り神と変貌したことを物語っている。すると、ここに河勝が小人でかつ祟り神であるという宿神、摩陀羅神と習合する要件は整っていたことになるが、一方で彼は侏儒に齎かれていたであらう少彦名神と結び付いて来ることも考え得る。以下、その点を少し考えてみよう。

う。

秦氏と少彦名神は、一つには渡来氏族と常世神という、共に今来のものであるという共通点がある。その常世神に河勝は深く関わっていた。いうまでもなく、今来のものは強大な威力をもち、それゆえに怖れられた。軍神としての河勝が祟り神になる要因はここにも求められる。もう一つ、秦氏と少彦名神との関連の手がかりは酒にある。さきに挙げた『聖謄抄』には秦酒公も河勝と同様、壺の中で育ったがための名であると伝えているが、別に本朝でのこととして、

仁徳天皇詔曰。秦王所献糸綿。絹綿朕始服用。柔温暖始触皮膚。自今以後千秋万歳。卿姓曰波陀。以族花徳。今字訓為波陀。即依恩詔也。時諸臣連等王榮寵妬賊害心起。仍山背国乙訓郡長岡林下於。王独行伺。則劫殺之。抄略秦氏滅諸宗族。是時乙訓勝部ヒソカニ王稚子隠酒壺内藏養之。至長大。(中略)即賜名曰秦酒公。其酒壺生長以故也。

という伝えをも載せている。従って酒公もまた小人の常世神と考えられていたことは、酒が仙薬であるだけ、一層あり得たはずである。秦氏が酒造技術をも持っていたことは、『本朝月令』に

応神天皇之代。百濟人須曾己利人名。参来。始習造酒之事。

と伝えられることなども明らかにである。ところで、『記紀』には所謂「さかほかひ」の歌の唱和が伝えられている。

C 此の御酒は 吾が御酒ならず 神酒の司 常世に坐す
いたす 少御神の 豊寿き 寿き廻はし 神寿き 寿き狂はし
奉り来し御酒そ あさず飲せ ささ

D 此の御酒を 醸みけむ人は その鼓 臼に立てて 歌ひつつ
醸みけめかも 此の御酒の あやに うた楽し ささ『紀』

神功皇后摂政十三年二月条)

ここで少彦名神は酒の神として出て来る。Cの歌は皇太后のもので、この「少御神の」というのは単なる修辞ではあるまい。皇太后が少彦名の資格になって、豊かにはき、くるくる旋回してははき、今ここにまつり来たった酒であると解するべきで、觴を捧げる時には同じ動作が行なわれているのであろう。Dの武内宿禰の返歌も同様に歌いつつ舞いつつ酒を醸したさまが歌われている。ここにも動作が考えられる。すなわち、酒を醸するための甕或いは壺を舞台として少彦名神が舞い歌うという芸能をここに考えることが出来る。

さて古代には境、すなわち境界線に甕を据える習俗のあったことを伝える記事がいくつかある。

大吉備津日子命と若建吉備津日子命とは、二柱相副ひて、針間の氷河の前に忌甕を据ゑて、針間を道の口と為て吉備国を言向け和したまひき。(『孝霊記』)

甕坂は(中略)一家いへらく、昔、丹波と播磨と、国を堺ひし時、大甕を此の上に堀り埋めて、国の境と為しき。故、甕坂といふ。(『播磨風土記』託賀郡)

これらは甕を据えただけというふうにとれるが、実はその前段階に酒を醸したことは容易に想像できる。⁽⁹⁾大避神社の一説にも、酒公を併祀したからオオサケと称するという伝えがあるが、境で酒を醸したということがその背後にあるのだろう。「サカイ」「サケ」「サコシ」「ジャクジ」「シユクシン」という語の関連は確かにある。境に甕を据えるのは、醸した酒を境外の精霊に与えて侵入せぬことを約束させるのか、甕に強力な靈魂をこめて侵入を阻むのか、いずれにせよそこに一つの芸能の場を考えることが出来る。小さいがゆえに

靈威ある少彦名神、侏儒とその入壺舞をここに想定することも不可能ではない。

それはそれとして、不老不死の薬を求めた秦始皇の末孫という秦氏と、常世国の仙薬である酒と、医薬の祖ともされる少彦名命とは、やはり目に見えないつながりがあるように思われる。

五

宿神の本質は小さいがゆえに靈威ある神であった。それゆえに本尊の後戸に秘仏として祀られた摩訶羅神とも習合した。服部氏は『榮華物語』巻二、花山天皇出奔の条

寛和二年六月廿二日の夜俄に失せさせ給ぬとの、しる。内のことらの殿上人・上達部、あやしの衛士仕丁にいたるまで、残る所なく火をともして、到らぬ限なく求め奉るに、ゆめおはしまさず。太政大臣よりはじめ、諸卿・殿上人残らず参り集りて、壺くをさへ見奉るに、いづこにかはおはしません。あさましういみじうて、一天下こそぞりて、夜のうちに関く固めの、しる。中納言は守宮神、賢所の御前にて伏しまろび給て、「我宝の君はいづくにあからめさせ給へるぞや」と、伏しまろび泣き給。

に出て来る従来不明とされていた「守宮神」を、この神の本質からして、賢所に添って立つ小祠の神で賢所を守る性格の神という解釈を示された。すなわち天照大神の御霊代の鏡に付き添って、これを守護しその靈威をうながす重大な役目を受け持つ神とされたわけである。春日大社の背後にも佐軍神社という小祠があるが、これも宿神で同様の意味を持ち、芸能の徒はこれらの神を操る呪力を持って

いたがために恐れられたのであった。

すると、すぐ思い合わされるのが「ムスビ」の神である。右の服部氏の宿神に対する解釈は折口信夫のいうところのむすびの神の働きと似通って来る。八神殿の神と宿神との関係はどうなるのか、これをどう解くか、残念乍ら稿者はその答を持ち合わせていない。ただ『天武紀』十四年十一月丙寅条

E 為^ニ天皇^一招魂^レ之。

朱鳥元年正月己未条

F 御^ニ御宿殿前^一、而倡優等賜^レ禄有^ニ差^一。

の記事は後の鎮魂祭につながるものにまちがいはなく、Fの倡優の中に侏儒も参加したであろうこと、又「御宿殿」は実体が明らかでないが、靈魂をこめた甕が据えられていたことを仮定するとその靈威を発動させる動作が「踏む」ということであろうと想像でき、後戸の神を発動させるのと同じである点に注意しておきたい。

管見に入ったところ「宿」に「むすぶ」の訓はないようだが、後戸の神・宿神と八神殿の神のつながりは何かあるものと思われ、その鍵は鎮魂祭の検討にあると思われる。

注1 『折口信夫全集』第一卷四〇頁。

2 『分類農村語彙』二七九頁。

3 『文学』昭和四九年一〇月、五〇年一月、二月。

4 今井啓一『秦河勝』三二頁。

5 林屋辰三郎『中世芸能史の研究』三一六頁。

6 『羽衣形成考』『三田国文』第二号。

7 「秦氏の研究——その文明的特徴をめぐって——」『史学雑誌』昭和
三六年三月、四月。

8 一方でこの記事は子部大神が土地の精霊であったとも考えられる。

とすると『聖著抄』の川勝の兄、敏通が大極殿の地主神になったという伝承が思い合わされる。いずれにしても小さい神が考えられている。

9 井口樹生「さかほがひの要因」『上智大学国文学論集』第二号。